

ある日の面接風景より

真岡市立真岡西小学校 佐藤和之

1. 外国人児童の受け入れにあたって

真岡市立真岡西小学校（以下、本校）は市内でも最も児童数の多い学校であり、児童数は全校で1212名である。そのなかに100名以上の外国人児童（二重国籍を含む）が含まれている。国籍はブラジル・ペルー・フィリピン・中国・ボリビアなど多彩である。

外国人児童といっても入学の経緯はさまざまであり、日本人と同一の手続きで小学校一年生に入学する児童もいれば、母国で何年間か就学した後、編入学してくる児童もいる。また、ときには日本国内の小学校から転校してくる児童もいる。

外国人児童の多くは、移住労働者として母国から仕事を求めて来日してきた日系人家庭の子どもたちである。より良い労働条件を求めて中部地方や関西地方から転入してきたり、逆に転出したりするケースもある。真岡市内の拠点校間での転校も少なくない。

今回は、上記のような児童への対応のうち、転入の際の、教員と外国人児童・保護者との面接について紹介することにする。

2. 受け入れの手続きの一環としての面接

6月下旬のある日、通訳として本校に派遣され

ている日本語指導助手から「日系ブラジル人の兄弟が隣の小学校から転入するかもしれない」という連絡が入った。連絡をくれた日本語指導助手は、市内の各外国人児童生徒教育拠点校を巡回している方であった。

転入に際しては、在籍校や真岡市教育委員会（以下、市教委）もしくは保護者から連絡がある場合が多い。しかし、今回は日本語指導助手からの情報であった。そして、事前情報の通り、その児童は前の小学校、市教委と手続きを済ませ本校に転入することになった。

日本人の転入の場合は、在籍校発行の「在学証明書」、「教科書給与証明書」、そして市教委発行の「入学許可書」を持参して来校すれば、その日から登校が可能となる。

しかし、外国人の場合、手続き上は日本人と同一であるけども、転入後のトラブルを避けるために日本の学校におけるさまざまな規則を、母国語に翻訳して詳しく説明するために、通訳を介して、受け入れのための面接を必ず行っている。

今回の場合も、在籍校と市教委に連絡を取り、7月上旬のある日の午後3時より本校日本語指導教室（通称、ハロールーム）において面接を行った。

ちなみに、通訳として本校に来てくださっている日本語指導助手は、民間の派遣会社社員である。会社と市教委との間で契約を結び、本校には月曜日から金曜日までの1・2校時、水曜日には3・4校時にも来てくださっている。予定以外の時間に来ていただく場合には追加の支出を伴うので市教委と常に連絡を取り合って来ていただく。

面接当日、転入児童である5年生女子、4年生男子そして母親の3名が来校した。学校側として、学級担任と日本語指導教室担当者そして通訳の日本語指導助手の3名が対応した。以下、本校における面接の流れについて順を追って紹介する。

これから面接での様子を記すが、あくまで今回の場合であり、必ずしもこのような流れと言うわけではない。

- 1：お互いに自己紹介した後、持参した書類の確認を行う。10年以上前、真岡市では日本語が話せない場合、学年を下げて編入学させることがあったけれども、現在では進学後のことや本人の学習意欲等を考え、年齢通りの学年に編入させるようにしている。
- 2：本人の通称を確定し、児童及び保護者の正式名の語順やスペル等の確認をする。保護者は児童が日本語の読み書きが不十分な場合、カタカナやひらがなの表記を希望するが、中学校卒業まで使うことを考慮し、可能な限り漢字による表記を勧めている。
- 3：本人について「日本語会話能力・身体状況・性格や長所短所・進学希望の有無・在日希望年数・ハロールーム通級希望の有無」の確認をする。ここでの情報をもとに、その後、学級担任と日本語指導担当者が指導方針を決めていくことになる。
- 4：「家族状況・住所・緊急連絡先」を確認する。日本語を話せる家族や友だち、保護者の連絡先を確認する。家庭と確実に連絡が取れるようにしておきたいからである。そして住所をもとに登校班・下校班を確定し、班長と顔合わせを行い、登下校の集合場所や集合時間を

知らせる。

- 5：日課表や欠席等の連絡の仕方・学用品や服装や集金など、学校の規則を知らせる。特に、集金については後々トラブルにならないように定期集金と不定期の集金があることを確認する。また、遠足や宿泊学習等の校外での学習についても教育課程の一環であることを確認する。今回の場合、日本の学校間の転入であり、母子ともにある程度、学校での規則を理解していたけれども、来日間もない場合には母国の学校生活との違いについて、説明に多くの時間を要することになる。例えば、ピアス等の装飾品は着けてこないこと、おやつを持ってこないこと、給食があり冷たい牛乳が出ること、香水を付けないこと、徒歩による集団登下校をすること、等々。
 - 6：転入する学年・学級に関して、時間割や行事などについて説明をする。以上で、面接はほぼ終了となるが、学用品や体操着の購入や引越し等を考慮し、いつから通学するかを決めておくこととした。そして、家庭状況調査票に必要な事項を記入して登校時に持参するように説明をする。
 - 7：在籍することになる教室の場所やトイレの場所、昇降口・靴箱等を説明した。授業中であれば、転入する学級の児童に紹介する。ここでの第一印象がとても大切である。
 - 8：最後に、一通り面接が終了したら、校長室にお連れし校長と面会をする。校長が本校の教育方針を説明し、元気に登校するよう励ます。
- ※なお、転入学ではなく、母国から直接編入学してくる場合には、説明の内容及び書類も異なるので、ご注意願いたい。

③. 担当教員の努力が報われるとき

以上で面接は終了であり、面接終了後は市教委に面接結果などを報告した。

市内の転校であるため、面接の手順を記してきたが、保護者がよほど日本語に堪能な場合を除いて日本語指導助手に通訳をお願いしている。「日

本語がわかる」という保護者に私たちが説明しても、大切なことや微妙な言い回しが伝わらないことが多いというのが実情である。多くの資料を使い、1時間以上かけて、ていねいに説明したにもかかわらず、後日、同じような内容で質問に来ることもある。

また、一通り説明し、「わかった、わかった」と言っても、転入後、無断欠席をしたり、学校の規則を守らなかったりする場合も少なくない。

しかし、根気強く、何度も保護者に働きかける

うちにお互いの信頼関係を築くことができ、転入学をきっかけとして、外国人家庭が日本の社会に適應できるようになるケースもある。このような場合には、私たち日本語指導担当教員の努力が報われたかたちになる。

真岡市には現在3,400人ほどの外国人が居住し、その数は増加傾向にある。外国人児童及びその保護者と日本人とが共生していくためにも、今、学校のもつ役割は極めて大きいと私は思う。